
風の音

三毛音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の音

【コード】

N3915C

【作者名】

三毛音

【あらすじ】

私立、鹿波川高校。平凡な生活を送っていた白川光とその幼馴染の長谷川水希。彼女らの元に一人の転校生が現れて…。

ブローグ（前書き）

誤字がとても多いです。申し訳ありませんが誤字を発見した場合、
脳内変換を行ってください。

プロローグ

春の訪れ。

それは、実に平和で、平凡なものだけけれど。

本当は、大切なものかもしれない。

世界にも循環法則がある。

一見何気ない春の訪れでも、とても大切なことで。

ひとつの出会いもまた、大切なものなんだろうと思う。

運命。

世界の循環法則が存在するのも。

人々が出会い、変化するのも。

さまざまなものが原因で、滅んでゆくのも。

それは決められた道筋。

私は、そう考える人であった。

これは、そんな私の、日々の思い出。

私と、その人の。

運命の一部の物語。

第一章 ハジマリノヒ

私立、鹿波川高校。かなみがわじゅうこう 通称鹿波。

ここ、静岡でも比較的有名で、校舎も豪華。冷暖房は完備、生徒の質も完璧。そんな学校に、私はいた。

私は白川光。しらかわひかり ごく普通の高校生で、セミロングの黒髪が綺麗だとよく言われる学年首位の生徒。

基本的に鹿波は成績＋素行でクラス分けされる学校で、私はA組にいた。

ふと、ある生徒と目が合った。

「どうしたの？なんか考え事でもあるの？」

そう話しかけてきたのは幼馴染の大親友、はせがわみずき 長谷川水希。

彼女は17歳にしてポニーテールが似合う、明るいムードメーカー的な存在の子で、身長は低く愛らしいと評判。

「ううん、なんでもない」

「…そっか。ならよかった」

彼女とは母親同士が同級生で、家も昔から隣にあったという、まあ代々幼馴染同士ですよ、という境遇だったりする。

改めて見ると、やっぱり可愛い。

明るくて優しい上にこの容姿。さらには、色々気を遣っているの
で、それはもうモテモテだったりする。

「こらー、席に着けー」

そんなことを考えていると担任のムサイ雰囲気にする池本先生が、それはもう「ガラッ」という擬音語がぴったりなドアをあけて教室に入る。

生徒たちはあわてて席に戻るの、どこの学校でも一緒なのだろう。

「今日は珍しい転入生がいる」

唐突に、まさに唐突に発せられたその台詞で、教室全体がどよめ

いた。

「知ってる奴もいるかもしれない顔だが一応今日からこの一生徒だからよろしくな」

さらに教室はどよめく。

「……ってことは、有名人かな？」

前から水希ちゃんがひそひそと話しかけてくる。

「……それはないんじゃない？」

言いかけた瞬間。

「じゃあ入って来い」

先生が廊下で待機していた生徒に入るように言った。

入ってきたのは、一人の男子だった。

「……………あっ！」

「えっ!？」

しばらく間を置いてから水希ちゃんが何かを思い出したように叫んだ。

つられて、私も叫んでしまった。

「どっ……どうしたの水希ちゃん」

昔あつたとかそんなのかなあ？

「あの人……もしかして……」

あ、目が光って赤面してる。

「お、よかったな。知ってる奴が居たぞ」

笑いながら先生が転入生の肩をたたく。

「嬉しくもないですけどね」

転入生の子は平然と小さく言い放った。

そして先生が黒板に「東 明」と書いた。

「ん……?なにあれ。トウ……メイ？」

「あずまあきらです。よろしくおねがいします」

呟いたのが聞こえたのか、東と名乗った子はそう言った。

「え、長谷川は知ってるみたいだがな……」

先生が言おうとした瞬間、東君が鋭い目つきで先生を睨んだ。

「…っ、なっ… なんでもない。えー、白川。お前の横、コイツの席な！」

「えっ… あっ、はい」

唐突に言われたからびっくりしちゃったけど、色々思うことがあった。

(…水希ちゃんのこれと、先生が言いかけたの…なんだろ)
多分それは、クラス中のほぼ全員が思っていた。

HR終了後。

「ね、ね。水希ちゃん。東君って何者？」

気になったので聞いてみた。

「うん…東君って、多分…」

「きゃーっ！」

またもや言いかけて、他人に邪魔された。今度は女子の歓喜の叫び。

「東君って…まさか！あの世界的なピアニスト・東明!？」

「えっ…!？」

女子の声にもびっくりしたけど、東君の正体にはもっとびっくりした。

「本当!？」

水希ちゃんに聞いてみたら、

「うん、多分そうだと思う」

そうだったみたい。

そしてその瞬間、クラス全体がどよめいた。

当の東君はため息をついている。そしてそれを沈めたのもまた、東君だった。

「君たちさ、僕が何のために学校にいると思ってるの？」

冷たく研ぎ澄んだ、氷の刃のような声がそれを沈めた。

「騒がないで欲しいんだよね。いちいちさ。僕がここにいるから、なんなの？」

そう言った東君は踵を返そうとした。

私は思わず、手が出た。暴力とは違う意味で。

いつのまにか、私は彼の腕をつかんでいた。

「…何？」

「え、あ、いや…」

言葉に詰まっていると、もう一本、彼をつかむ腕。

「…ごめんね、東君。私達、ピアニストとしての東君じゃなくて、

鹿波の生徒の東君とあったのに、騒いじゃって…」

そう言ったのは、今にも泣き出しそうな水希ちゃんだった。

「…別に。もう慣れてる」

振り払うようではなく、優しくすっ、と手を払われて、東君は教室から出て行った。

「…すごいなあ、光ちゃん」

「え、なにが？」

「あんなオーラ放ってる人の腕、掴んじゃうんだもん」

教室の生徒たちの視線は私たちに向かっている。いや、むしろ私だけに。

「あつ…あれは、…なんでだろ」

ああ、思い出したら赤面してきちゃった…。

「可愛いなあ、光ちゃん」

「そつ、そんなことないって」

水希ちゃんはニコニコしてるだけ。

ああ、なにこの状況。

次の授業前にはしつかりと東君は戻ってきた。

やっぱり、教室全体の空気は重かったけど。

「なあ、あんたら」

「ほえ？」

授業後、水希ちゃんと話していた私はいきなり東君に話しかけら

れた。

「さつきは悪かった。こっちもイライラしてたから……」

先刻の謝罪だろう。いや、謝るべきはこっちの生徒なんだけどね。

「いいよいいよ。元々私たちのほうが悪かっただけだし」

「でもあんたたちは何も言っていないだろ？なのに……」

意外と優しいみたい。

「うん、気にしないで」

水希ちゃんもそういう。

「……さんきゅ」

彼は申し訳なさそうに礼を言った。そして、ふと気づく。

「あ、東君てさ、A B型？」

「あ？ああ、そうだけど？」

やっぱり。多分、気分で雰囲気とかほぼ全部変わる、所謂多重人格いわゆるというやつだろう。

「あはは。わかるんだ」

「うん、なんとなく」

軽く笑う彼を、水希ちゃんはじっと見ているが、彼はそれに気が付かないみたい。

「……あと、もうひとつ」

そういつて彼は私をじっと見た。

「え、何？」

「……あんた、ピアノやってみない？」

「はえ？」

その言葉を聞いて、私は間の抜けた返事をしてしまった。

(なんであたしなんだろう……)

学校の休み時間は、アメリカの学校並みに短い。普通は10分なのだろうが、ここは5分だ。

次の授業中、私は全然集中していなかった。

「できれば今日中に答えを聞かせてよ」と言われたものの、どう

するか迷っていた。

ピアノが嫌いなわけではない。むしろその音色は惹かれるものがある。

でも、私はピアノが弾けない。それどころか、ピアノを弾いたことがない。さらには、ピアノ自体触ったことがない。

(超初心者の私が今更…ねえ)

考え続けていた。

(なんで水希ちゃんじゃないんだろうなあ…)

水希ちゃんはピアノが弾ける。コンクールでも何回か入賞したことがある。それに、水希ちゃん自身が東君に惹かれてるんだと思う。でも東君はなぜか私を指名した。

私には、それがわからない。

(…あんなに可愛くて、優しくて、ピアノが弾ける女の子なんて滅多にいないのになあ。それにそんな子にすかれてるのがわかんないのかあ…)

「白川さん」

「はえ？」

突如横から話しかけられた声は、無防備だった私にまた間の抜けた声を上げさせた。

「何？東君。呼び捨てで良いけど…」

「そう。とりあえず、ゆっくり考えてよ。今日中に、とは言ったつたけど、別に急ぐ話じゃないし」

完全にさつきとは別人のような雰囲気。もう凍りつくようなそれは、穏やかなものだった。

「…うん。でもなんで水希ちゃんじゃないの？」

「なんでって、なんで？」

「水希ちゃんがピアノ弾けるのくらいわかるでしょ？」

「うん。わかつてる」

え、わかつてた？

世界的ピアノリストでもピアノ弾いてる人の手で腕つかまれただけ

でわかるものなのか…？

「じゃあなんで？」

とりあえず聞いてみる。

「僕は勿論長谷川さんにもすごい才能があるとおもう。でも…」

彼は、私のほうを指差しながら。

「キミは、育てればジャックの豆の木並に育つと僕は思っただけだね」

どういう表現よ。でも、言いたいことは通じた。でも。

「…水希ちゃんより私のほうが才能あるってこと？」

「そうなるね。勿論、長谷川さんに才能が無いわけじゃなくてさ、キミ個人がとんでもない化け物になる可能性を秘めてるってだけ」

「でも私、ピアノなんて弾いたこと…」

言いかけて、彼が止めた。

「…僕が興味を持ったのは今のキミじゃない。化けたキミに僕は興味がある」

「…捨てたりしないよね…？」

冗談交じりで言うてみる。

「さあ、どうだろう。オが無ければすぐに…かもね」

ニヒルな笑みを浮かべた彼に、私は背筋が凍るような気配を感じた。

(…本気だ)

そんなやり取りを経て、授業は終わった。

「光ちゃん」

授業後、すぐ。

「なあに？」

前から水希が話しかけてきた。

「東君の申し出、受けるの？」

「うーん、今考えてるんだけどさ。どうしようかなあ…って…」

「さっきの話聞いてたら、光ちゃんすごいみたいだし。東君が言う

ならそうなんだろうと思うし……」

あ、聞こえてたのね。

「せっかくだから光ちゃんもピアノやってみれば？ やったことないんでしょ？」

「そうだけど……全然駄目なのよねえ……」

溜息交じりで言うのと、水希ちゃんはにっこり笑って

「東君も言ってたでしょ？ 未来の光ちゃんに興味があるって」

そう言った。

そう、私には才能があるとも言われた。

「……でも」

「それに、光ちゃん今まで熱心に何かやったっていったら、勉強くらいでしょ？」

言いかけたところをちよつと痛い言葉が突き刺さった。いや、水希ちゃんは悪意無いんだろうけど。

「……せっかくだし、可能性にかけてもいいと思うよ」

私は（なぜか）斜め下アングルで言われた。

「……じゃあ、やってみてもいいかな」

微かでも、未来の可能性にかけるのは、いいことだと思うから。

「じゃあ僕の申し出を受けてくれるんだ？」

「はえ！？」

突然背後に立っていた東君にかけられた言葉に吃驚した。

（……「神出鬼没」って言葉は東君にピッタリだ……ってどうかピッタリすぎる……）

そんなことを考えていた。

「あ、東君」

「ハロー。今度ピアノ聞かせてねん」

「東君に聞かせるほどのものでもないよ」

水希ちゃんと東君は軽い調子で挨拶。

「……」

それをちよつと考えつつ眺めていたら。

「…なにさ」

話しかけられた。

「…いやさ、東君、本当にさっきからコロコロと性格変わってるじゃない？」

思っていたことを口に出してみる。

「まあね。そういうものでしょ」

そういうものなのか？

「ちなみに私達A型なの」

水希ちゃんが言う。

「お、几帳面。長谷川さんはそうだろうなあ、って思ったけどね」

「あはは」

めちゃくちやいい雰囲気。取り残されてる私は何？

「…白川さん、部活は？」

「へ？…帰宅部だけど？」

いきなり質問されたからちよっと吃驚。というか、私は吃驚しすぎかな。

「…ふうん。長谷川さんは？」

「私？私も帰宅部。以前ちよっとあつてね」

「そつか。過去の話は思い出さなくて良いよ。辛そうだし」

「うん、ありがとう」

私はこの質問の意図がずっと気になっていた。

「…じゃ、今日は…」

ぱん、と手を叩き、東君は。

「僕の家に来てもらうとしよう。時間大丈夫だよな？」

今日会ったばかりの私たちを、家に招待してくれた。

『うわあ〜』

その日の放課後、私たちは東君の家に招待されて、二人で声を上げていた。

東君は笑いながら、

「そんなに驚くこと？」

と聞いてきた。

東君の部屋は一般的なマンション。でも、想像を絶するようなものだった。

「…驚くよ、普通。世界的なピアノリストが一般的なマンションにいるって言っただけで驚くのに、普通の『一般的なマンション』の部屋からは想像できないもん、この部屋」

水希ちゃんはそう言った。

たしかに、『一般的なマンション』からは想像できない。

「そう？」

「うん、それに一人暮らしなんでしょ？なのに…」

そう、その高校生男子の一人暮らしの部屋は。

「こんなに綺麗なことないよ、普通」

私たちは比べ物にならないくらい綺麗だった。

壁を触ろうが、棚を触ろうが、埃なんて殆ど手に付かない。

部屋のレイアウトもきっちりし、実際以上の広さを感じさせるものになっていた。

「テレビの位置とかもすごい…完璧すぎる…」

私がそんな風に呟くと、東君は。

「家具の位置はね、風水で決めてるの。で、広く感じさせるための工夫もちよいとしたら、こんなかんじになったんだよね」

ありえない。いや、世界的なピアノリストが高校生で、しかも私たちと同級生、その上私に興味を示している時点でありえないんだけど。

これは既に『高校生』じゃない。

「ピアノは無いんだね」

水希ちゃんが聞くと、東君はにっこり笑って

「ここじゃ他の皆さんに迷惑かかるからさ。普段は別のところでやっってるよ」

そう言った。

「じゃあどこでやってるの？」

水希ちゃんが再び聞くと、またにつこり笑って

「僕の家は覚えたよね。じゃあ次はそっちにいこっか」
そう言った。

ちなみに、水希ちゃんは東君の笑顔を見るたびに色々反応が起こった。

「ここが僕が普段やってるところ」

そういつて連れられてきたのは、ここもまたありえなかった。

だって、グラントピアノが置いてある、防音壁が張られている小さな軒家だったから。

「…ここも凄い綺麗…」

あちこちに花が植えられた植木鉢がある。

「あ、すごい綺麗なアザレア」

水希ちゃんがそう言ってひとつのピンクの花が植えてある植木鉢に近づいた。

「あ、わかるんだ？」

「うん、綺麗な花だよな」

二人は花について話している。けど私には分からない。

「アザレアって？」

聞いてみることにした。

「アザレア。別名西洋ツツジ。アジア原産のツツジがヨーロッパで改良された品種。色は赤・ピンク・白など。花期は室内管理で2月から4月。花言葉は」

東君が淡々と行って、言いかけたところで。

「『愛されることを知った喜び』」

水希ちゃんが答えた。

「…ふうん。やっぱり可愛いね、長谷川さん」

「え！？いや、そんなことないよ！？」

唐突にかけられた言葉で、水希ちゃんは面白いように動揺した。

「いや、容姿も十分なんだけど、性格とかそういう知識とかさ」
笑いながら東君はいう。

「い、いや……ありがとう」

水希ちゃんもすっごい照れながら礼を言う。

「礼を言われるようなことじゃないよ。思ったから口にしただけ」
そういう東君。

ちよつと、私の中で仮説が生まれた。

(この二人、両思いなんじゃないかなあ)
だったらいいのにな、とも思ったけど。

その後も花トークが飛び交い、私は多々置いてかれたけど、楽しかった。

第二章 ホホエミノウラ

正直なところ、今日はありえないこと続きだったと思う。

世界的ピアニストの家に行った後ってこんなものなのかなあ？

夜、私は東君の部屋に比べたら劣るものの割りと綺麗な自室のベツトで横たわっていた。

明日からは基本的なピアノの練習をするらしい。

東君は「弾く」側だから、教えるのはそんなに上手くないらしい。だから水希ちゃんも一緒にコーチングしてくれるとのこと。はあ。私にできるんだろうか…。

「あ、光ちゃん。おはよう」

翌朝、家を出た瞬間に水希ちゃんに話しかけられた。

よくあるんだよね、同時に家を出るの。

「おはよう。天気いいね」

「うん」

にっこりと水希ちゃんは笑う。

昨日から、水希ちゃんの花笑みがパワーアップしてる気がする。

(…こりゃあたしじゃ届かなくなるなあ…)

そんなことを思いつつ。

「よ」

朝、基本的に私たちは一番最初に学校に着くんだけど、先客がいた。

「あ、おはよう」

東君だった。一体なにしにこんなに早くに来たんだろう。

「おはよう。何してたの？」

あ、水希ちゃんが私の疑問を聞いてくれた。

「ん？ピアニスト休業中だから給料がなくてさ。貯金は腐るほどあ

るんだけど一応ってんで小説書いてた」

「小説!？」

なにこのマルチな才能。うらやましい…。

「すごいなあ。なんでもできるね」

「そうでもないよ。適当に書いて権限フル活用すれば出版なんてお手の物。印税が入ればこつちのもの、さらに俺の名前でプレミアムつくんだからどんどん収入が…」

「ダークすぎるよそれ」

「冗談冗談。まあそうなるかもしれないけど、小説は本気で書いてるよ」

本当に冗談なんだろうか。

「出版したら買ってみようかなあ…」

「欲しかったら直筆の原稿あげるよ」

「え、いいの？」

ぱつと目が輝いて水希ちゃんが言う。

「うん、出版後はもういらないし。それに…」

「プレミアムものだって？」

予想できたので言ってみた。

「ビンゴ! ネットオークションでもすれば数千万は安いもの…」

「売らないけどね」

今回のトークはなんかダークだ。

その後、次第に生徒が来たので東君は書くのをやめて、どこかへいった。

「でもさ、ほんとに東君色々できるよね」

帰宅路。正確に言うくと東君の帰宅路なんだけど。

「そうでもないよ。さっきも言ったでしょ? 権限フル活用で…」

「あはは」

東君と水希ちゃんは笑い合っている。

でも私は、それどころじゃなかった。

「…どしたの？」

私が見ていたもの。すなわち、テストに成績表。

「…なに、落ちたとか？」

「うう…」

そう、落ちたの。

「何位…？」

水希ちゃんが恐る恐る聞く。

「じゅ…十三位…」

学年首位キープならず、なんてもんじゃない。

すさまじい落ち方だ。

「…私、八位なんだけど…」

水希ちゃんが言う。

「…珍しいね、私に負けるなんて」

「いやあ…はは、は…」

つり笑いしかでないよ。

「二人とも頭いいねえ」

東君がしげしげと表情を眺めつつ言う。

「いつもは光ちゃん、首位なんだけどね。たまあゝに、今回みたいなことがあるの」

「お、つてことはなにかショッキングなこととか起こったの？」

う。当たり前。

「あ、凶星だ」

「あ、もしかして…」

「…うん」

そう、水希ちゃんの考えは正解。

「失恋でもしたの？」

「う」

なんて勘が鋭いんだろう。東君は。

「…そうなんだ」

「…うん、二週間くらい前にね」

そう。二週間前、私は失恋した。
というより、告白の前にヤラレただけれども。

さかのぼること二週間ちよつと前の5月12日。

「わ…わ…」

決心して告白することにした。

「わ…わたしと…」

相手は同級生の桐谷和馬君^{きりやかずま}。でも。

「つ…」

「か…つ…つ…つ…」

そこまで言つた瞬間に女子生徒にぶつ飛ばされて階段から落ちて意識不明。

翌日には回復したもののショックで死人みたいな顔してたとか色々あつたとか。

まあ、私は覚えてないんだけど。

んで、今の自分があるわけですけど。

「へえ〜。もてないんだね」

「悪かつたね。水希ちゃんみたいに可愛くないんですよ〜」
嫌味っぽく言ってみる。

「あはは、そりゃそうだ」

え、なにその当然の如くの反応。想像通りだけど、なんかちよつとひねって欲しいな。

「…ねえ、東君」

「ん？」

先ほどの言動、昨日の言動。

ちよつとある仮説を言ってみることにした。

「東君、水希ちゃんのこと好き？」

できるだけ、直球に。

いや、別に意味は無いんだけど。

「ちょ…光ちゃんなに聞いて…」

水希ちゃんが顔を真っ赤に染めて慌てふためいて言う。
そして、その答えは。

「…好きだけど？」

驚くほど平然とした表情で言われた。

「…東君、わかってる？」

「ん？何が？」

こりゃ分かってないな。

横で水希ちゃんは失神しかけてる。

「今の質問、友達としてではなくて、異性として好きかって聞いた
んだけど…」

「うん、分かってるよ？」

え。

ってことは、つまり。

…両思い？

「…何驚いてんの？」

「いや、なんかそりゃあもう。だって世界的有名人が自分の幼馴染
好きとかマジでありえないし…」

「失礼な。ちゃんと想ってますよ？」

決定的証言。

「水希ちゃん、東君知ってたんでしょ？ファンとか？」

「え…うん、まあ」

ちよつと誘導してみよう。

「ふうくん…じゃ、付き合ってみる？」

その唐突過ぎる発言に。

「は！？」

「え！？」

私達は一瞬呆けた。

「…いいの？」

「うん。全然」

「…じゃあ…おねがいします」
え、ちよつと。

私の幼馴染は、出会って2日しかたっていない世界的有名人と付き合うことになりました。

「じゃあ今日からやってみようの会会長として…」

「やってみようの会って何さ」

東君の別荘(?)にて。

「適当でいいの。とりあえず、ドの音分かる…?」

私はピアノのいすに座って、東君と水希ちゃんは私を挟んでコーチング。

「えと…これ?」

「それ”ミ”の音だよ」

「え?あ…」

「…ふむ。楽譜は読める?」

「ある程度なら…」

ピアノを触ったことすらなかった私は、早速間違えた。

「まあ、ぼちぼち覚えていこうよ」

「う…うん」

「東君も私も、最初っからできるなんて微塵も思っていないから安心して」

それはちよつと悲しいよ?

「ドはこれ。黒いほうの鍵盤目印にしたほうがいいよ」

私が今受けているのは、普通の人でも分かる基本的なもの。

引けない人でも分かるんだけど、私はピアノの半径10メートル以内に入ったことが無いから、全然知らない。

「…水希ちゃん、でいい?」

東君が水希ちゃんに言う。

「…うん。私も、明君でいいかな?」

「勿論」

おいおい、ここでいちゃつくな。

「じゃあ水希ちゃん、最初のほうよろしくね。僕もちょっと忙しいから…」

「うん、頑張つてね」

そう言つて東君はその場を立ち去つた、けど。

「…あ、ごめんね。あんな話して」

「…いいよ…なんかもう、慣れた感じする」

失恋時といい今日といい。バカップルだらけか。

「…じゃあやるつか」

「うん」

気にしないことにしよう。

東君と水希ちゃんに迷惑をかけないためにも、早く上達しなげや。

「…ふふ…やつぱりかわいいなあ、水希ちゃんは」

二階。明の部屋。

「…さて、どう化けるか、楽しみだね…？」

「そうね。早く上達してくれればいいんだけど」

明と、もう一人。

同い年くらいの女性がその部屋にいた。

「それにしても意外ね。あんな子彼女にするなんて」

「かわいいと思わない？」

「まあ、私も思うけどさ。明、ロリコンでしょ？」

「失礼な。誰のためにこうやつて食費稼いでると思つてんの？恩を知つてよ」

「…二人とも、凄い才能。だから私としては早めに摘みたいんだけど…」

「期は熟してない。待て」

「…そうね。待つわ」

カーテンを閉め切つた暗い部屋、明の机の明かりだけが部屋を照らす。

「…できれば早期に化けて欲しいんだけどね」
そう呟いて、明は執筆に専念した。

翌日。

「おはよう、光ちゃん」

再び登校するとき、水希ちゃんに会った。

「ああ、おは…よ…」

正確には、もうひとり。

「おはよう、白川さん」

「あっ…東君!？」

「むう。なにその反応は。居ちゃ悪いの？」

「いや、そうじゃないけど…びつくりしただけ」

ほんとにびつくりした。

「彼女の登校のお供をするのは普通だけどねーん」

東君はそういうと水希ちゃんに抱きついた。

(ここまでノリが軽くなるのかなあ…)

困惑していた水希ちゃんと笑っている東君をみながら、そんなことを考えていた。

学校、朝。

「学校では苗字で呼ぼうね」という東君の案で学校では一応付き合っている事実はまだバレていない。

そんな関係で、私たちは。

「いい天気だねえ」

「そうだね。こんな日はそとで遊びたいなあ…」

「わ。似合わね」

「失礼な！」

そんなやりとりをしていた。

「そんなことだから、学年主席キープできなかったんでしょ？」

「う。あっ、あれは…事情があったから！」

東君は、人を追い詰めるのが上手い。
現に私も東君の口車に乗せられてる。

「そついえば長谷川さんさ」

「ん？」

「ポニーテールも似合ってるんだけど、そのまま結び目を髪の毛のほうにやってみてくれないかな？」

「こつ？」

水希ちゃんはゴムをはずして、纏めた髪の毛の先のほう、といっても先端から10cmくらいはあるんだけど、そこを結んでみた。

「…わ」

「お。似合ってる。それもいいかも」

「そ…そう？」

照れ笑いしている水希ちゃんは、雰囲気も全然変わった。

「なんか、かわいいながらも大人っぽくなった感じがする」

「そ…そうかな」

やっぱりかわいい。

でも、クラスのいたるところから視線を感じるのは多分気のせいじゃないと思う。

(水希ちゃん、女子にも結構人気だしなあ…)

最早クラスのマスコット。そんなかんじ。

まあ東君といる間は誰も近づこうとしないんだけどさ。

「オラー、席つけー」

ムサイ担任が入室。とたんに視線を感じなくなり、全体的にぴしつとした雰囲気が出た。

「今日は東に続いて転入生だ」

「え？」

驚く水希ちゃんを尻目に東君は。

「お。なんか頻繁だね」

疑問を持ってよ。

「入ってこーい」

そして現れたのは、一人の女子生徒。そして。
「なっ……」

ガッツと、東君が驚いて席を立った。

その女子生徒は、単ににっこり笑っただけだった。

第三章 イモウトノヤマイ

その女子生徒は東君に向かってにつこりと笑い。

東君はその女子生徒をみて驚きを隠せないでいる。

「なっ…なんでお前っ…ここに…」

怒るような口調で東君は女子生徒に聞いた。

「いいじゃない、別に。私も勉強しなきゃ」

「そんなことを聞いているんじゃない！」

「バン！と東君は机を思いつきり叩いた。

「お…おいおい、どうした東…」

先生が困り果てた表情でいう。

「ッ…カナンがなんでここで生きていられるんですか！」

カナン？女子生徒の名前かな？

「…アキラ。現代科学をナメないでほしい、ってことよ」

「科学…！おまつ、あれは服用すると！」

「いい加減にしろ！」

東君が怒りをあらわにすると同時に、先生も怒鳴り散らした。

「とくに異変は無いと本人も言っているんだ！早く席に着け！」

「先生は知ってるんですよね！？じゃあ尚更！」

怒鳴りあいは激しくなっていく。もう、クラスでついていける人は居ないみたい。

「だから、万が一の場合は…！」

「それが怒ったら最期おわりなんですよ！？」

「アキラ！」

今度は、カナンといわれた子が東君を制止する。

「…」

それを最後に、東君は黙って教室を出て行った。

「…どうしたの？」

HR終了後の屋上。

屋上は基本、開放されている。

そのこのフェンスに、東君は寄りかかっていた。

「あの子、知り合い…?」

「…」

「お願い、話して?」

水希ちゃんと一緒に探しに来たら、屋上で見つけたのでそのまま話をする。

「…あいつは…」

「アキラ」

それを止めるかのようにカナンという子が現れた。

「…あれ、挨拶、なのかしら?」

「…お前…!」

激しい睨み合い。

「えと…あの…」

戸惑っている、カナンって子は私たちに気が付いたらしくこつちのほうを向いた。

「挨拶ができなかったわね。私、東華南^{あずまかなん}。明の妹よ」

「…へ!??」

いきなりの妹の登場に、私たちはもう、びっくりどろろの話ではなかった。

「…双子の、な」

東君が補足した。

双子。同じ日に生まれた兄妹っていうこと。

「…華南。なんでお前…あの薬を…」

「何故、と聞かれても困るんだけど…?」

再び険悪なムード。

「あつ、えと、東君、ちょっと説明してもらえるかな?」

「…ああ」

二日ぶりに聞いた、あの冷たく研ぎ澄んだ氷の刃を思わせる声。

「さつきも言ったようにこいつは俺の妹だ。双子の、な」

「私もA B型なのよ」

「は、はあ……」

そんな返事しかできなかった。

「俺はごくごく普通の状態で生まれた。二卵性の双子ってことを除けば、普通だった」

フェンスにもたれかかりながら話を続ける。

「でも華南は、先天性の、世界で始めての病気にかかってた」

「え!?!」

「当然薬なんて無い。毎日のように発作が起こってたらしい」
続ける。

「俺の記憶、一番古くても3歳の頃だ。俺は保育園にも行かず、ずっと華南の病室にいた。そこで、親の職業でもあったピアノを弾いた。それがピアノを本格的に弾き始めた理由だった」

「私は無菌室から出れなくて、外の空気を吸ったことが無かった」
華南ちゃんが補足をする。

「…華南はずっと僕と一緒にいた。でも僕と同じ空気を吸う事は無かった」

「でも今は薬でどうにかできるようになったの。だからここにいる」

「…リスクを背負う気満々、か」

「何のリスクもなしに何かを得られるなんて思うな、って言ったのは明でしょう?」

「……………」

不穏な空気が流れた。

「…なんかよくわかんないけど……」

水希ちゃんがその空気の中喋りだす。

「…辛かったら、いつでも言ってください。できるかぎりのことは、やりたいから……」

「……………」

そういう水希ちゃんを、華南ちゃんはじっと見ていた。

「ふうん…明が選ぶのも分かるわね…」
そう呟いて、

「…うん、そのときはよろしくね。水希ちゃん」

「はい！…って、名前知ってたんですね」

ん、まあそりゃそうだろうけど。だって。

「よく明が話してくれたわ。昨日も見たしね」

そういうこと。でも。

「昨日見たってというのは…？」

疑問を口にしてみる。

「昨日、ピアノの練習してたでしょ？あそこ、実は私の家。実質、

明の別荘みたいなもんだけどね。二階のある部屋は完全な無菌室。

明がいつも料理作ってくれるし、生活上不便は無いの」

ああ、あそこ華南ちゃんの家だったんだ。

「まあ、そんなわけでこれからよろしくね、水希ちゃん、光ちゃん」

あ、私のことも知ってたみたい。

「うん、こちらこそ。…えっと、華南ちゃん…で、いいのかな？」

水希ちゃんが言う。

「ええ、勿論」

「よろしくね、華南ちゃん」

再度挨拶を交わした。

「あ、授業始まるよ。いこ、明君」

「ん？…ああ、ちよっと色々することがあるから、1限目休むって
言っついて」

「え？…あ、うん。わかった。じゃあとでね」

「おう」

調べるごとして何だろうとは思うけど、東君の問題。干渉しても
意味は無いだろうから、放っておいたほうがいいな。

「ただいま」

授業後の休み時間。

短いその時間が始まって2分ほど経ったころ、東君は帰ってきた。

「あ、おかえり」

「意外と遅かったわね」

「え？」

華南ちゃんの発言にひっかかるものがあった。

「それってどこに行ってたか見当が付いてるってこと？」

「勿論」

すごい…双子ってシンクロしてるんだね。

「…お前も無茶するもんだな」

「あら、あなたに言われたくないわよ」

「そうかもな」

そういうと東君は呆れ顔で両手を挙げて、

「OK、いることは仕方ない。学校にいることはいいとしよう。でも、これ以上無理するなよ」

そう言った。

つまり、華南ちゃんの転入は承諾したってこと。

「あなたの許可は要らないけどね」

「そう言うな。ないよりマシだろう」

「それもそうね」

さつきと似たやりとりを経て。

「じゃあ、水希ちゃん、光ちゃん、改めてよろしくね」

世界的有名なピアニストの妹は、私たちの同級生になった。

その頃、すでに運命の歯車は回っていた。

「まさかあいつまで入ってくるとはな…」

戸に隠れて、一人の少年が静かに呟く。

「…俺の存在に気づくんも近いか…うー、どうしよかなあ
関西弁のその少年は。」

「…ま、いこかな。暇やし…それに、会いたいし、な…」
懐かしそうな目で教室の中を覗いていた。

第四章 オサナナジミのエガオ

あれは、いつだったか。

確か、8年前の春だった気がする。

暖かな陽気。散り始める桜。病室の見慣れない顔。

あいつは 誰だ？

「起きろ」

「ふげえ!？」

目覚まし代わりに明が喰らったのは、華南の放った踵落しだった。それも、腹部に、クリーンヒットで。

「ちよっ…ゲホッ…おま、何しやる!」

「もう時間よ。さっさと起きなさい」

時計に目をやると、7時を回っていた。

「…やつば」

久しぶりにドタバタした朝。

明が思っていたのは、夢のことだった。

「あ、おはよう」

「おはよう。いい天気ね」

「そうだね」

一方、学校。

私たちが教室に入って3分としないうちに東君と華南ちゃんが入ってきた。

華南ちゃんは相変わらずの様子で。東君は、なにかしら悩んでる様子で。

「…どうかした？」

気になったので問うてみた。

「…ん?ああ、なんでもない」

なんだろう。

「悩み事なら相談に乗るよ？」

「大丈夫。大したことじゃない」

水希ちゃんが心配そうに言い、東君が遠慮をしている。

ふと、東君が教室の戸の方向を振り向いた。

そして言い放った。

「…出てこいよ。ばれてるから」

へ！？誰かいるの！？

「…おーおー、久々やゆうんにご挨拶やなあ」

関西弁で姿を現したのは、長めの髪の毛の男子だった。

よくよく見ると、毛先は緑色を帯びているような気がする。

「…虫の知らせか…今朝の夢は…」

「お、奇遇やねえ。俺もあんときの夢見てはったわ」

「…気になったのって、その夢のこと？」

「ああ…」

そうだったんだ。

でも、東君はなんか身構えている。なんで？

「あら、久しぶりね。元気だったかしら？」

「お蔭様でな。外に出れるようになったみたいやし、おめでとごさんな」

心から喜んでいそうな仕草をする。

「えつと、誰？」

水希ちゃんも困惑した顔で問う。

「…レイ・サヴァレイ…。一応、フランス時代の幼馴染…なんだけど」

「なんだけど？」

「…失踪… 8年前に失踪した、はず…」

し、失踪！？

「そそ、それで俺ここにおんねん」

随分軽い様子。

「… ああ、性格にいうとな、誘拐されて、どういう経路かは知らんねんけど海に流されたみたいでな、気づいたら兵庫におってん。で、色々放浪した末にここに去年落ち着いたって訳や」

華南ちゃんは納得した様子で、東君はあきれた様子で、レイ君は喜んでる様子で、それぞれ違う表情を浮かべている。

「って訳で同じ学年やしなんかいも顔見てはるけど、一応はじめましてな。レイでええから。… あ、俺一応ハーフやねんで。日本とフランス。髪は染めた… ちゅうか染めさせられたんやけどな。だからちよつとは親近感でるやろ」

「はあ…」

色々混乱してるんだからそんなこと言われても…。

「… お、アキラお前カラコンしてはるん？」

東君の顔を覗き込んだレイ君が言った。

「… 色々面倒だろ」

「私もしてるのよ、ホラ」

「… っていうかカラコン？」

「… ねえ、なんでカラコンなんてしてるの？」

「あ、私も気になってた所」

水希ちゃんもそう思った。

「… ああ、まだ話してなかったっけか。俺と華南、日本人とフランス人のクォーターでさ。片目青いんだよ」

「え、そうなの？」

「… そうよ。色々聞かれると面倒だから、カラコンしてるけど」

「虹彩異色症（じりさいいしやくせい）って言うんやで。バイアイとかオッドアイの方が馴染みあるかもしれへんけど」

双子な上虹彩異色症…。それも両方って、すごい稀なんじゃない？

「… 私はこうやってフランスの方が濃く出てるけどさ、明は結構日本人みたいだから普通に日本人として暮らしていけるのよ」

黒髪と金髪。双子の兄妹でも結構差が出ることってあるんだね…。

「俺の目も青やで。っていうかそれはええねんけどな」

あ、ほんとだ。気づかなかった。

「殺気放って戸に隠れてたほどの理由なんだろうな？」

「一応な。今度の学校祭、俺とアキラとカナンで吹奏楽の助っ人い
くで」

提案が突拍子も無いね。

「…自分だけでやってるよ」

うんざりな顔で東君が言う。心労で倒れそうなのが心配なだけ
ど…。

「そもいかへんで。もう言ってもうたし」

「オイ！撤回して来い！」

「いややわ、めんどいもん」

「なに人の許可なしで」

「いいわね、それ。私も明も行くわ」

言い争っている中、華南ちゃんが言う。

「何言つて…勝手に俺の行動を決めるな」

「いいじゃない。どうせ暇なんでしょ？」

それを言ったら私も暇なんだけど…。

「東君、大変だねえ」

ぎゃあぎゃあ言い争っている3人を眺めつつ、水希ちゃんに言っ
てみた。

「まあ…大変だろうねえ…」

水希ちゃんは苦笑いでそういう。

「往生際悪いなあ」

「いい加減、観念したらどう？」

「誰が。俺のフリータイム奪わせやしねえよ」

「自己中やなあ…」

そんな会話を聞いていると、ふと気づく。

「…東君、一人称『俺』になってるよ。怒るとなるのかなあ…」

「あー…。多重人格なんでしょ？」

「あ、そっか。そういえばそうだよ」

謎の多い3人の言い争いは。
いつのまにか教室の注目の的になっていた。

「ところでさ」

「ん？」

放課後、水希ちゃんは家の用事で先に帰宅。で、私と華南ちゃん
で喋っていた。

「レイ君って楽器弾けるの？」

「一緒に助っ人行くで」って言ってたけど気になったので聞いて
みることにした。

「…あいつ、見かけによらないけどバイオリン弾けるのよ。私はピ
アノはたしなむ程度だから、基本的にはフルート吹くわね…」

3人で合奏できるんだね。すごい…。

「…なんかさ」

「なにかしら？」

バイオリンと聞いて思い出すのは、あの名作。

「…レイ君って耳をすませ…」

「そんな映画の影響受けてへんって」
言いかけて遮られた。

「…そう？ならよかった。私あれ好きだから…」

「俺も好きやったけどな。こっちでも一応ギターとかバイオリンと
かで稼いでるんやから」

「そうなんだ…」

ちよつとガツカリしながら。

皆が舞台上がるのを、結構楽しみにしておくことにした。

「おじやましまーす」

そして、華南ちゃんの家。

「大勢で悪いなあ、カナン」

今日は昨日のメンバー+。

レイ君も一緒だった。

「なんでお前も来てんだよ」

「ええやん、アキラのいえやないんやし」

早速口論。仲がいいのか悪いのか。

「…とりあえず俺はカナンと再会の喜びトークしてくるで二階におるわ」

「…だそうよ。あとヨロシクね。明」

そう言うのと二人はさっさと二階に上がっていった。

「…あの二人さあ、付き合っていない？」

「今はわかんないけど昔は付き合ってたよ。確か4歳でカレカノだった気がする」

随分早いね。

「相思相愛だったからなあ…。僕の入る隙なんてなくて、あいつが病室に来るようになってから疎外感あったよ」

「子供のうちって、そういうの感じやすいんだよね…」

「まあ、慣れてはいたけどさ。それより光さんは練習。」

「うん。とりあえずは……………」

沈黙。

「…いや、何その沈黙は」

「…先は長いよね…」

「がんばるよ…」

それは私が現段階では絶望的だといいたいのね。

「…と、とにかく頑張るから。自分でできるように早くなるからさ」

そういうと、東君は。

「…がんばれ」

親指をぐっと立てて言った。

ちよつとちよつと、私はまだ初心者なんだから、仕方ないじゃん

…。

それぞれの過去が現在の自分を織り成す世界だから、過去に経験

を残さなければならぬ。

私はその言葉を聞いたのは、そのすぐ後だった気がする。

第五章 ウンメイニマケタオト

あれかれしばらく経ち、生活が大分落ち着いてきたころ。

「アキラく1年生からお客さんや」

レイ君は毎日のようにA組に（窓から）顔を出し、会話している。そのいつもの第一声が、いつもとは全く異なるものだった。

「…客？」

「うん、客や」

別に驚くことも無いけど、初日で相当印象が悪かった東君に客人って言うのは初めてだった。

「その戸のそこにおるから」

「ふうん」

そう言つてすくつと立ち上がり、戸のところに行き、一歩出た瞬間。

東君が消えた。

「…？」

消えたというか、視界から消えた。

「おー、こりやまたすごいなあ、あの娘こ…」

「え、何、何が起きたの？」

「見た方が早いぞ」

気になったので私たちも立ち上がって廊下を覗いてみる、と。

「あー、みなさんお揃いで」

そこにあつたのは、女の子に押し倒された東君だった。

「お揃いでつてか、さっき話しとつたやん」

平然とレイ君がいる。

「え、東君、その子、誰…？」

大分凄い状況なので（水希ちゃんにいたつては大混乱だったので）問うてみた。

「あ？ああ、この子はね…」

東君は立ち上がって言う。

「ピアノスト時代の専属スタッフのお子さん」

あ、そうなんだ。

「俺もなんかいか見たことあるで、その子」

「そういえばレイ、僕のコンサート来たことあるっけ？」

「1回だけな。日本公演少ないやろ」

そう言ってる間も、東君は女の子を抱きかかえたままだし、女の子も離れようとしない。

「…あ、東君の専属スタッフのお子さんね」

「遅いよ、水希ちゃん…」

水希ちゃんの脳はようやく正常起動したらしい。

「ところで明。紹介はしてもらえないのかしら？」

「ん？ああ、そうだったね」

そういうと東君は女の子を下ろした。

身長の低く、私の腹部の高さくらいしかない、綺麗な長い金髪の髪の毛の女の子だった。

「リーレ・ファルサリエです。よろしくお願いします…」

そういうと頭を下げた。

「…っていつか自己紹介あとでいい？ちょっと用があるから…」

「ん、ええで」

東君が言うつとすぐにレイ君が答えた。

「…リーちゃん、ララさんのことだから…どうせ僕の家泊めてもらえ、っていつてたんでしょ？」

「うん。お母さん、今まで以上に忙しくなるからって」

ララさんってリーちゃんのお母さんのことか。

「…悪いことしたね…。安定してたのに引退したせいでまたあちこち飛び回る事になって…」

リーちゃんは首を振り、言う。

「明君のせいじゃないよ。元々やめろって言われてたわけだし…」

これは…ちょっと暗い事情…？

「まあ、だからこそ僕に養えつてことなんだろうけどね」

「あはは。お母さんらしいでしょ。無理だったら断ってね」

「大丈夫。お金くらいいくらでもあるし」

そう言つて二人はちよつといい雰囲気だ。

「…と、そろそろ戻つた方がいいよ」

「うん。じゃああとでまた来るね」

そう言い残し、リーちゃんは走つて階段を下りていった。

「…なんか、すごい仲よさそうな感じだったね」

思つたことを口に出してみる。

「…まあ、結構長い付き合いだし、待ち時間とかもずっと一緒にい

た分華南より『妹』つていう感じが強いんだろうね」

「ふうん…」

まあ、華南ちゃんより「妹」つて感じではあるね。

「ちつちやくて可愛いしね」

「まあ、ね。でもそれ、本人には言わないですよ」

「コンプレックス？」

聞いたその時、東君の表情が数段暗くなる。

「…そんなもんじゃないよ、あの子は…。あの子、成長止まつてか

ら何年経つか…」

その言葉を聞いて、私は凍りついた。

成長の停止。それがあらわすのは「肉体的な死」とも一つ。

精神的なショック。それも、そうとう大きいもの。

「覚えておくといいよ、白川さん」

三度聞くことになつたあの氷を思わせる声。

「誰にでも消したい過去やトラウマはある。不用意に地雷を踏まな

い方がいい。特に僕の周囲の人はそういうのが多いから気をつけて」

「あ…うん」

沈む空気。

「…さ、戻ろうか」

東君が明るい声でそう言つて、それぞれ教室に戻つた。

昼休み。

休み時間が短いから、と東君がまとまって取れる昼休みにみんな
で屋上で弁当を食べながら自己紹介を終えたところだった。

リーちゃんの愛称は「リーちゃん」でそのまま決定。

リーちゃんは母親が東君のマナージャーをしていたころから片親
で、東君が引退してから世界各国を飛び回って仕事をしているらし
い。それでしばらく一緒にあちこち飛び回っていたけれど、日本に
東君がいるからお世話になっちゃいなさい、と言われてそのままそ
うなつたらしい。

「じゃあリーちゃん、6ヶ国語くらいはなせるんや？」

リーちゃんはレイ君みたいな関西弁キャラは馴染みやすいのか、
結構溶け込んでいた。

「はい。英語とかフランス語とかドイツ語とか、ラテン語とかも少
しなら」

おお、マルチ翻訳家。

「ラテン語なんて使うことあるんか？」

「殆ど無いですね。そっちにいくことも少ないですし」

「僕もそっちの方は滅多に行かなかつたからね」

楽しそうに会話をする。

「リーちゃん、明の家に泊まるんでしょ？襲われないように気をつ
けてね」

「だれが襲うかつての」

華南ちゃんの一言を軽く受け流し。

「…ま、アキラは大丈夫やる。ララさん、やったっけ？その人の性
格上やるう思うてもやれへんて」

「お察しの通り…って、だからやんねえって」

そんな感じでその場は楽しい雰囲気が終わった。

「リーちゃん、文化祭前に入ってきたってことは色々大変でしょ？」

いつものメンバー+ が帰宅路を通る。

「はい、でも頑張りますし大丈夫ですよ」

あれからも色々話していたけど、芯の強い子で結構前向きだということがわかった。

「応援してるねっ」

水希ちゃんからも悪い印象は無く（パニックに陥ってただけで）人に好かれやすいこともわかった。

「でも、最初に比べて随分賑やかになったね。東君が編入してきた、華南ちゃんも来て、レイ君が顔出してリーちゃんが編入して…」

水希ちゃんが言う。

私もそう思う。東君を基点にどんどん輪が広がった気がする。

「…それも運命でしょ」

そう言った東君の顔は、笑っていないがどこか寂しげな雰囲気を感じさせた。

「…運命って、すごいね…」

水希ちゃんがぼつりと呟く。

「…せやな。でも、『運命』っていう言葉、ホントにそれだけやない、よな？」

レイ君が東君に言う。

「…そうだね。少し話をしよう」

レイ君は話して欲しかったから振ったのか。

「運命って、何だと思う？」

続けて東君が発したのは問い。

私は、そう問われるとわからなくなった。

運命って、ナニ？

「僕はね、世界を作った…『造物主』って言えばいいかな？の『物語』だって思ってる」

そう言った東君の顔は、寂しげで、悲しげで、絶望をも宿したような表情に見えた。

「僕らの世界で起きたこと、考えられたこと、これから起こること、

考えられること。ぜんぶ、『運命』で片がつく。それはそれほど恐ろしい言葉で、理由としても絶対の存在であると思うんだ」
場が静まり返る。

「それぞれの過去があつて、それぞれの未来があつて。それで、今の自分が存在する。過去と未来を分けるのが現在いまで、その現在いまを織り成す為に過去があり、今織り成すから未来がある。僕はそう考えてる」

沈黙がしばし流れる。

「…なんてね。ごめんね、変な話で」

「俺が振ったからやっただけやる？」

「まあそうだけど」

そんなやりとりをしている二人を。

私は、凄く悲しい感情を抱きながら見ていた。

今の話、要するに。

東君は、負けたんだ。

運命に。

その重さに。

その絶対的な存在に。

その感情は、しばらく忘れることができなかつた。

第六章 オタノシミノジカン

リーちゃんがメンバー入りした。

癒しオーラ全開で、水希ちゃんに劣らない「華」な雰囲気で。

「文化祭明日だねえ」

今日、6月28日は。

「そうですね。こっちにきてすぐに文化祭だったので吃驚しました」
鹿波の前夜祭である。

「大変だったでしょー、色々。慣れないうちから共同作業で」

「でも、おかげでみんなとも大分仲良くなれたし…」

いつものメンバーで、いつもの屋上。

最近、私と水希ちゃん、東君、華南ちゃん、レイ君、リーちゃん
と、6人で昼食をとることがおおい。

「そつか。ならよかった。リーちゃんかわいいからいじめとか心配
なんだよねー」

東君は相変わらず裏のありそうな笑顔で。

「ここの生徒はいじめみたいなことしないわよ。頭のいい生徒ばかりだもの」

華南ちゃんは相変わらず黒い雰囲気を宿した表情で。

「せやで、アキラ。疑心暗鬼すぎるのも浮いてる要因の一つや」

レイ君は相変わらずヘラヘラ笑いで。

「あはは。明くん、変わんないね。人を遠ざけたがる癖」

リーちゃんは相変わらずほんわかかな雰囲気です。

「昔からだったの？」

水希ちゃんはいっそう東君とラブラブな雰囲気です。

そして私は、前より孤独感を感じて。

この前夜祭を迎えました。

とはいえ。

「でもカナンとヒカリんは準備で手一杯なんやろ？」

いつのまにか「ヒカリん」呼びされているが、実はそう。
私と華南ちゃんは、余裕が無い。

「そうなのよねえ。少しは遊びたかったけどこの分じゃあ無理ね」
溜息をついて残念そうな表情で華南ちゃんはそういう。

「残念やなあ、カナンといちゃつきながらあちこち回ろつと思ってたのに…」

こちらも残念そうな表情でレイ君が言う。

「…そういえば華南ちゃんとレイ君、付き合ってるの？」

私はふと思いついて言う。

「…」

二人は沈黙で顔を見合わせて。

『何を今更』

と言った。

「あ、やっぱりそうなんだ？」

「なに言ってるはるん。俺ら再会当日に付き合ってたで？」
なに…？」

ということ、水希ちゃんと東君、華南ちゃんとレイ君がそれぞれ付き合ってる。リーちゃんは年下。つまり、ポジションが一番悲しいのは、私。それも、大分前から。

「…彼氏作るうかなあ…」

「そんなに淡々と作れるようなものでもないでしょ？」

呟きが、東君のツッコミで意味を消される。

「うう…。そんなはつきり言わないでよ…」

「ごめんごめん」

笑いながら東君が言う。

でもこれ、ほんとにやばいよ。私の立場はどうなるのよ。

しかし。私には今そんな余裕なんて無い。

準備準備で大忙し。いいよね、暇な人は…。

「お疲れ様ね」

報告のために予算の紙を見ながら使用した金額を計算していると華南ちゃんが声をかけてきた。

「あ、ありがと。そっちは終わった？」

「なんとかね。そっちもそれで最後の仕事でしょ？」

「うん。やつとフリーだよ」

そういうと、華南ちゃんが少し考えた様子をし。

「…前夜祭で声が芽生えるような計算でもしてみ…」

「しないから。そんなに悲しい人間じゃないから！」

最後の部分を遮って言う。そんなに悲しい目で見ないですよ。

「ほらほら、最後やつちゃうやつちゃう」

「あ、うん」

止めたのは華南ちゃんですよ、というツッコミは伏せておこう。

「…しかし、あれやね」

夜。基本的に前夜祭は泊り込みでやるこの学校。

つまり、うちの文化祭は最大の恋愛イベントみたいなもの。

「…屋台みたいなんないとおもわないなあ」

「そうですね…。なんか、寂しいです」

レイ君とリーちゃんは言うが、屋台なんてでないよ。文化祭だから。

「かるちゃん。カーにばる、面白いですか？」

リーちゃんがこっちに向かって問う。

「うん…まあ、準備とかで力をあわせるのが面白いし、劇とかやつてるところもあるからさ」

「劇ですかあ」

「まあ、高校生がやってるんだから演技くさくさでしょうがないけどね。臨場感、ってやつが出てないし」

「ほえ…」

リーちゃんは相変わらずすぎる感じがする。容姿に見合っている。

「まあそれなりに楽しめるでしょ」

東君が言う。そういえば、ここでは私と水希ちゃん以外文化祭は初めてだよ。

「…まあ、おもしろそうなところ大体見当つくからいいっか」

「そうだね。今日は劇とかやってないみたいだし白川さんに任せるよ」

みんなも東君に同意しているみたい。うわ、期待はずれだったら申し訳ないよ、これ。

「わー…すごい…」

校庭に着いた瞬間リーちゃんが歓喜の声をあげたのは、去年より大規模になった気がする、キャンプファイアーを見たから。

「キャンプファイアーかあ。なんか、ハズレてない？」

うん。文化祭でキャンプファイアーをすることに意味は無いでしょうね。

「まあみんな楽しそうだしいいんじゃないかな」

水希ちゃんが言う。

「…あれ、華南ちゃんとレイ君は？」

二人がいないことに気づいた水希ちゃんが言う。

「…まあ、気兼ねなくいちゃいちゃしたいだろうね。嫌な妹」

そんなことを呟いて、東君はキャンプファイアーをみる。

「…人って不思議だよ。命を脅かしかねない炎をこっやって楽しんでる…」

また呟いたその言葉は、以前話した運命のときのことと酷似していた。

「…スリル、だろうね」

「…はは、そうだね」

しばし沈黙が流れる。

「…あ、鳥さん」

リーちゃんが沈黙を破って上を指差した。

そこには、夜飛んでいることがおかしいような、真っ白な…それも、光っているような、大きな鳥が飛んでいた。

頭上を見ていたリーちゃんのところ、その鳥の白い羽がふわりと落ちる。

「…希^{こいねが}う…大空へ羽ばたかんとする翼が生えんことを…」

そつと、その羽に向かつてリーちゃんが言う。

「…さ、もつと近くで見ようよ」

「え？あ、キャンプファイアーね。うん、行こう！」

一瞬リーちゃんが使った言葉に戸惑いながらも、私達はキャンプファイアーのところへ行つた。

一方で、屋上。

「…なあ」

レイと華南が柵にもたれかかりつつキャンプファイアーを眺めて言う。

「なに？」

「俺ら、いつまでこうしてられるんやろな」

「…さあね。…運命が決めた、そのときまででしょう」

「…はは、そらそつやな。せやったらその時まで、一緒にいよか笑いつつ、レイが言う。

「…そう、ね。それが私達にとって一番いいのかもしれないわね」
くすりと、こちらも笑いつつ華南が言う。

暗い夜空と火の明かり、双方を眺めつつ二人はそのまま黙り込んだ。

朝起きると、見慣れた教室なのにどこか不思議な感じのするように見えるなあ、ということを真っ先に思った。

「あ、光ちゃん、おはよ」

隣にいた水希ちゃんがあいさつをする。

「おはよ。今何時？」

問うと、少しはなれたところにいたリーちゃんが、

「もう7時45分ですよー。ほらほら、明君も起きる起きる
そう言いつつ東君をゆすっていた。」

「リーちゃん、頭痛いからやめて…」

言いつつ東君は起き上がる。

「おはよ。大丈夫？」

「昨日のあれ、なんだったのさ…。まだ響いてるんだけど…」

あ…。昨日のアレね。わかる。

「明君、大丈夫？」

水希ちゃんも心配そうに言う。横にいるリーちゃんも心配そうな表情だ。

「ん、まあ大丈夫でしょ。はは…」

作り笑いをしながら東君は言う。

「でも、私もちよつと頭痛いです…」

リーちゃんもそういう。

二人の頭痛の原因は、私達にとっては慣れたことだったりする。

「恒例行事だからね、あれ。私達も去年はちよつと辛かったかなあ…」

「だからって、カラオケ大会であそこまでやる？普通…」

毎年恒例、カラオケ大会。

それは、体育館で行う前夜祭限定行事。男子から女子、1年生から3年生、拳句の果には教師も入ってパーティーする。マイクはもちろん使うし、周囲も凄い盛り上がりなので翌日は二日酔い並に頭痛が起こり結構な被害を起こしてるとか。

「…それもじゃぱにーず・かるちゃーですか…？」

リーちゃんが言う。

「ジャパニーズ・カルチャー、っていうよりカナミガワ・カルチャーだよ、これ…」

恐るべし鹿波川。ありえないでしょ。

「…レイと華南は？」

東君が痛む頭に顔をしかめながら問う。

「さあ…わかんない。昨日からいな…」

「呼んだ？」

「うわっ、吃驚したあ…」

後ろを見ると（相変わらず）窓から顔を出してレイ君が会話に参加してきた。

「よお。昨日は楽しめたかい？」

「まあまあやな。そっちはどないや？両手に持ちきれん花に囲まれた一晩やったやろ？」

「そういう言い方は良くないと思うぞ？まあ、楽しかったけど」

皮肉気に笑うレイ君と、無表情の東君のやりとり。

「お前あれやん？カラオケ大会行ったやろ？」

「うん。お蔭様で頭痛が酷いわ…」

「私も結構痛いです…」

リーちゃんも辛そうに言う。

「ってわけで昨日姿くりました侘びや。ほれ」

そう言っただけで投げしてきたのは頭痛薬だった。さすがといつかなんといつか、気が利くね。

「さんきゅ。…華南は？」

『水無し錠』が売りのその頭痛薬を飲んで東君が言う。

「まだ寝とるで」

「そうか」

会話はそこでやっと終了。

「…ところでリーちゃん、それどないしたん？」

いつの間にか「リーちゃん」が「リーちゃん」になっている。私も似たようなもので気にしないことにしよう。

レイ君が指したのは、昨日の羽。

「これですか？きのうキャンプファイアーに行く前にふわって落ちてきたんです」

にっこり笑ってリーちゃんが言う。

「そか。なんや綺麗な羽やなあ、って思ってたん」

こちらにもにっこり笑いながらレイ君が言う。

「そういえばリーちゃん、鳥、好きだよな」

東君が言う。そういえば昨日、「…あ、鳥さん」とすぐに気づいてずっと眺めてたっけ。

「好きなんですけど、憧れなんです」

「憧れ？」

水希ちゃんが不思議そうな顔で言う。

「…わたしも、鳥さんみたいに自由に、なににも縛られず飛べたらなあ、って…。もっと、お日様の光を浴びたいなって思うんです」

それを聞いた瞬間、東君の表情が若干変わった。しかし、すぐ笑顔に戻った。

「そっか。…なるといいね」

東君がそういうと、リーちゃんにはにっこり笑った。

「…ちよっと、トイレ行ってくるね」

すぐに東君が言って、立ち上がる。

「ほな俺も行くわ」

そう言ってレイ君もついて行った。

「じゃぁリーちゃん、その羽、どうするの？」

問うと悩んだ様子でしばし考える。

「…わたし、リボン使うときあるんですけど、ちよつと白いしそれにつけますね」

立ち上がってリーちゃんは鞆から真っ白なリボンを取り出して、どこからか出した裁縫道具で縫い始めた。

「あの娘このそれはお前のせいちゃうで」

男子トイレ。そこでレイが壁にもたれかかっている明に言う。

「…でも、随分たつてもあの娘の傷は癒えない…。癒して、あげれない…」

胸元を押さえ、苦しそうな表情で明が言う。

「傷が癒えんのは端はなから分かりきってたはずやろ？」

「…でも…。それでも…あの娘は…」

「気付くより、気付かんほうが幸せなこともあるで」

明の呼吸が次第に荒くなる。

「…なあ、アキラ。お前、あの時現場におったやろ？」

ピクリ。そう聞こえた気がした。

「…そう、僕はあの場所にいたよ。リーちゃんも、犯人も見た。…」

あの娘は…」

顔を抑え、呼吸もますます荒くなる。

「…話してくれ。すこしは楽になるはずや。それに俺も対応しやす

くなるで」

「…すまない」

そうして明は、過去の話をしてレイにした。

* * * * *

話も終わり、東はレイの表情を見、言う。

「…後悔、したか？」

「…ああ、ちよつと後悔したわ。…お前、今までこんな暗闇一人で

背負つとつたんやな…」

震える様子でレイが言う。

「…俺の暗闇じゃない。あの娘…、リーちゃんの暗闇だから…。俺

の知ってるのは一部だけだよ」

「…あの娘はもう覚えてへんよ。今の所知ってるのは俺とお前だけ

やろ。…っ…」

なにか辛いことを耐えるような表情で二人はトイレから出た。

「遅いね…二人とも」

二人が行ってから、15分くらい経ったころ。

「ですねえ……。なにかあったのかなあ……」
そう言いつつリーちゃんは白いリボンで髪を括くる。

ポニーテールのようにだけど、結び目がやや下の位置のその結び方と、金髪の髪が、一見あつて無さそうだけどなぜかマッチしていた。

「……よく鏡も無くてやれるよね」

水希ちゃんが言う。

「慣れました」

互いに笑いあつて、いい雰囲気になつていたそこに、ガラリと戸が開く音が響いた。

「ただいま。お、リーちゃん羽つけたんだ。似合ってる」

二人が入ってきた。心なしかレイ君の表情は暗く見えた。

「おかえり。レイ君どうしたの？」

「ん？どうもせえへんで？」

そう言つて笑う。

「おー、ほんまや、リーちゃん似合うとるで」

レイ君もリーちゃんのリボンを見て言う。

でも、おかしい。そう思つてたころ。

「……ねえ、そろそろ開祭式始まる時間じゃないの？」

レイ君と同様に、窓から顔を出したのは華南ちゃん。

「おーカナシー！起きとつたんか？」

窓越しに抱きついてレイ君が言う。

「さつき起きたところよ。起こせばいいのに……」

「寝顔可愛かつてん。起こすの悪いなあーつても思つたしな」

そういうことを言いながら、またいつものメンバーで行動するこ
とになった。

開祭式にはギリギリ間に合つたけど、先生には少し怒られた。

「……で、まずどこ行こか？」

文化祭当日は前半、後半に分かれて店番をする。店番はその場になきゃいけないし、当然それ以外は遊んでいる。私達は前半フリ

！。

「劇、いまやってるんですか？」

最初の行き先を皆で話し合いながら歩いていた。

「5分後にはじまるって。行く？」

リーちゃんが希望したのは劇。東君はいいみたいだし、私も賛成。
「私もいいよ。見たかったし」

「劇なんて見たこと無いからね。ちょっと興味あるわ……」

水希ちゃんと華南ちゃんも賛成。万丈一致で劇に直行することに。
「劇は体育館でやるから……。さ、行こっか」

先ほどの東君とレイ君の表情が若干気にかかるけど、とりあえず
楽しむことにしよう。

『君よ、希え！その身に偉大なる力を宿さんことを！』

天使のような、神のような男が一人の戦士に言う。

真っ先に来ただけあったて、最前列の席をキープでき、リーちゃん
んはすごく盛り上がっている様子だった。

『できません！私には、親友と戦うことなど……！』

劇はどうやら親友が戦争により引き裂かれて……、というものらしく、
演じ手もかなり力が入っている様子だった。とても高校生とは思えない。

『ならば選べ！今、己の死か、偉大なる力か！』

『ならば答えましょう。私は、命など惜しくない。友の命を奪いか
ねないのならば、そのような力など必要ない！』

観客もかなり見入っている様子だった。

「面白かったですねえ〜」

リーちゃんは大満足の表情で背伸びをする。

「そうだね。リーちゃんも満足してくれたみたいだし、なによりだ
よ」

東君はそう言って笑う。

多々東君やレイ君の表情が変わることはあった。でも私は、このときこれが何を意味するか分からなかった。

第七章 ジュウナセイカツクワン

タスケテ、タスケテ、タスケテタスケテタスケテ

その呪いを聞いた場所は、民家の庭だった。

雨が降っていた。到底小雨とはいえない、しかし土砂降りとまでもいかないくらいの雨。

そこには、男性と少女と少年の3人の人間がいた。

少女は全身血まみれで、恐怖と絶望の目の色をしていた。

男性はナイフを手にし、返り血だらけでこちらも血まみれだった。

少年は陰から見ているだけだった。いや、見ていることしかできなかった。

あれは忘れもしないあの日。呪われた、雨の日。

しかしそれは、当然といえば当然起こるべきことでもあった。

「…ん。明くん」

文化祭も終わり、家で寝ていた明は悪夢でうなされ、リーに起こされた。

「…夢…？でもあれは…」

「…どうしたの…？」

心配そうにこちらを見る少女は、先ほどの夢にいた少女だった。

「…ごめん。変な夢を見ただけだから…」

「…最近明くん調子おかしいよ…？心配事なら言っつてよ、わたしも力になりたいから…」

心臓が脈打ったのが分かる。

「…大丈夫。ごめんね、起こして…」

「きにしないで…。じゃあ、おやすみ…」

彼女が忘れたその記憶。

それは明にとって、重い真実。

そして、それは。

自分にとつても、必要である人物を失った悲しみ。そして、今後の不安にもなりえた。

7月23日。今日は、1学期の終業式。

『…ですので、皆さん、健康に気をつけながら…』
と話す校長の話など、誰も聞いてない。

私は、もちろん聞いていない。

あれからしばらく経った。東君やレイ君は、時々悲しい表情をす
る。

私には分からないことだろうけど、…話してほしくはある。

私の思考を現実につっ張ったのは、校長の一言だった。

『え、では最後に、今日でこの鹿波川高校を辞めることになった
先生の挨拶を頂きます』

壇上上がったのは、担任の池本先生だった。

『え、皆さん、今までここで働いてきた7年間、本当に楽しいこ
とばかりでした。これからも…』

などとスピーチをしている池本先生を、私は見ていた。

「…やっと終わったね、1学期」

終業式も終わり、水希ちゃんが話しかけてきた。

「そうだね」

「でも池本先生、なんでまた…？」

水希ちゃんが疑問を言うと、唐突に東君の声がした。

「…やな予感がする…」

この上なく不吉な小言だった。

「…なんで？」

「わかんない。でも嫌な予感がすぶっ」

「っ」。

いきなりリーちゃんが座ってた東君の背中に抱きついた。唐突に

ダイブされた東君は机に頭を打ち付けてた。

「…明くん」

小さな声で言うリーちゃん。

「…な、何？」

額をさすりながら同じく小さな声で言う東君。

「…あれ？なんだっけ？」

「は？」

東君から離れてちよつと考え込む。

「…うーんと…そうだ！ね、明くん」

そういうとリーちゃんはにぱつと笑って。

「8月29日にさ、お祭りあるんだって！みんなで行こうよ」

「ああ、あのお祭り？私はいいよ。行こう？」

水希ちゃんもにっこり笑って言う。

「どこのお祭り？」

まだ痛むらしい額をさすりながら東君が言う。

「近くの神社のお祭りだね、毎年結構お店でるんだ。私も行くよ」

「そう。勿論賛成だよ」

私が言うのと東君も笑って言う。

「華南ちゃんとレイ君はどうする？」

水希ちゃんが言うのと、東君の笑みは苦笑に変わって。

「あいつらは二人の方がいいでしょ」

「そりゃそうだね。」

「じゃあ知らせるだけにしよっか」

「だね。じゃあレイに言うてくるから」

「そういうと東君は席を立つ。」

「華南に言つといて。じゃあヨロシク」

ひらひらと振る手だけを教室の戸から覗かせてそのまま歩いていった。リーちゃんが、そのあとを追いかけてパタパタと走っていく。

「…で、私達は別行動でいいわけね？」

「…おお」

背後から唐突に声をかけられて、振り向いたそこには華南ちゃん
がいた。

「話聞いてたんだ？」

「盗み聞きは趣味ではないけどね。聞こえてたから」

「そっか。一緒に行った方がいい？」

「私はどちらでも構わないけど、レイが嫌がるでしょうから別行動
させてもらおう」

「うん、了解」

やり取りを経て。

再び、東君とリーちゃんが出て行った戸を眺めてみた。

「レイも華南といくってさ」

しばらくして東君がもどってきた。

リーちゃんも一緒に教室に入ってくる。

「うん、わかった」

そう返事をする、みんなが急に黙り込んだ。リーちゃんはきよ
とんとしていたけど。

そうして流れる沈黙を破ったのは、終了のチャイムだった。

「日本の伝統文化はすごいですねー」

8月29日。私達は神社に来ていた。

「すごいところはもつとすごいよ。みこしとか、色々大きいのが出
てきたり…」

リーちゃんは文化祭並にはしゃいで、水希ちゃんもリーちゃんほ
どではないがはしゃいでいる。東君も表面上は笑ってはいるけど、
裏で何を考えているのか、何を感じているのか想像もつかない。

でも、今私にできることは無いと思う。

「まずどこ行きたい？ボールすくい、射的、綿飴、りんご飴…」

東君の問いに、問いを返す水希ちゃん。

「東君はどこへ行きたいの？」

リーちゃんは適当に回ってれば面白そうなのには参加するだろうし、私はこれと違ってないかえあなあ…。

「…うん、レイと会うかもしれないけど、射的」

「レイ君、射的得意なの？」

「うん、得意っていうか、…玄人」

それはどういう意味だ。

「…まあいいや。じゃあ射的行こっか」

そう言っ射的の店がある場所へ行くことにする。

案の定、レイ君と華南ちゃんがいた。

「…お、アキラ。お前もやりに来たんか？」

「まあね。久々にそういうの触ってみたかったし」

物騒発言。それはそれは…どういう意味？

「ふう〜ん。ほな、俺はなに狙おかなあ」

銃を構えてレイ君が言う。

「コンボ撃ちする？結構倒れやすいぞ？」

「お、ええアイディアやん。どれにしようか…」

コンボ？って、どういう意味だろう。

「…じゃあさ、あの大目玉でええやん。でっかいモデルガン」

「いいけど、僕に利点は無いのか…」

「あとで100円払うたるから」

ふう〜、と長いため息をつき。

「…おっけー。じゃあ行くよ」

東君も銃を構える。そして片手に持ち、モデルガンの箱の上部を狙い撃ち。一瞬ぐらりとなる。そこへレイ君が撃ち、倒れ掛かった状態で更なる勢いをつけ、見事倒した。

「あちゃ〜…大目玉もって行かれたよ」

そう言う店主を尻目に、普通の表情の2人。

なるほど、コンボってそういうことか。でも、正確に、しかもちよつどいいタイミングで当てることって難しいはず。つまり、さっ

き言つてたやつ。玄人。

「…さて、じゃあ次はなんにしようかな…」と
そう言つて次々当てていく東君も、玄人なのだろう。

「大漁たいりよーう」

持ちきれないくらい量の量を取つたため袋をもらつてのお持ち帰り。

「結構簡単だったね。反動なかったし」

「せやね。まあ所詮は射的おもちゃやし」

え、それは…もしかして？

「…もしかして、実銃とか使つたことあったりするの？」

水希ちゃんもそう思つたのだらう、そう問うた。

「…まあ、ないこともないね。僕も、レイも」

「せやけど殺してはおらんで。俺らそういう主義ちゃうしな。一応
麻酔弾やつたもん」

「そつか…よかった」

安堵の息を漏らして水希ちゃんが言う。

そりゃあ、人殺しならなんで普通にピアニストやってられるんだ
！とか思つけどね。

そんなこんなで、私達は夏の終わりを満喫した。

そして東君のやな予感、見事に的中することになった。

第八章 カコヲシルヒト

少し暗い過去を見せそうだった東君も結局は過去を見せず、またいつもの通り隠し事をしまくってそうな雰囲気東君は。

今、私の横で驚愕の表情を浮かべている。

二学期の始業式。そこで私たちの新任の先生が紹介された。

ステージの上で校長に紹介されている新任の先生は若そうな女の人で、背も高くプロポーションもなかなか。顔もいいし、男子生徒には人気間違いなしだろう。

ふと反対側を見るとレイ君も驚いた顔をしている。

また東君の知り合いみたいだけど、年齢的にレイ君と同じような接点じゃないだろうけど…。

じゃあ、あの人は何なんだろう。そう考えていたとき、校長が気になるワードを口にした。

『この人が今日から2年A組の担任となる、ララ・サファルリエ先生です。フランスと日本のハーフで…』

…ん？

サファルリエ。

…んん？

「…ねえ、東君。あの人もしかして…」

東君に聞いてみる。

「…うん、そう…だけど…」

やっぱり。ってことは、あの人は…。

リーちゃんの、お母さん。

「はい、ってなわけで今日から担任になりますララ・サファルリエです。よろしくねん」

ハートマークが語尾につきそうな口調で挨拶。

始業式が終わり、教室で自己紹介をしていた。

教室は男子を中心にざわめいている。

「日本に来るのは初めてなので文化に違いがあったりして色々変なことがあるかもしれないけど、がんばっていきこう！」

無駄なくらいハイテンションな先生に教室はあまりついていけてない。

「…先生」

すくつ、と東君が立ち上がり、そこに視線が集中する。

「なあに、あ・ず・ま・くん？」

先生の対応に東君は深いため息をつく。

「…自分の子供預けてしばらく放浪かと思ったらこんなところでな
にやってるんですか」

東君が睨むような視線で口にした「子供」というワードに若干教室がざわめく。

「あら、いいじゃない。あの子もあの子であなたとの生活はエンジョイしてるみたいだし、あなたもそれなりに楽しんでるでしょう？」

「あなたは知っているはずですよ。あの子が一番僕の過去を思い出させる」

笑顔の先生と、対照的ににらむような表情の東君。

「…ここでするような話じゃないわね。あとにしましょう」

先生がそういつと東君はまたため息をつき、席に着いた。

「さて」

暗い雰囲気になりつつあった教室を先生が少女のような明るい笑顔で照らす。

「私のことは気軽に『ララ先生』でいいからとりあえずよろしくね
そう言つとチャイムが鳴る。

「じゃあ、解散つてことで。東君、ちょっとおいで」

本日すでに3回目のため息をつき、東君は席を立った。

「リーちゃんのお母さん、かあ…」

東君と先生が話してる間、水希ちゃんと華南ちゃんと私でしゃべ

っていた。

「ついでに明の元マネージャー、ってことになるわね」

「…あ、そっか。そうだね、そういえば」

「なあ、ちよつとええ？」

唐突に後ろから声がかかってきて、私たちはそつちを見て。

「ん？」

私たちは、硬直した。

そこにいたのはリーちゃんをお姫様だっこしたレイ君。

「…え、何、状況が読めない」

「そこで転んだみたいでな。なあララさん知らへん？」

リーちゃんを降ろしてレイ君が言う。リーちゃんは恥ずかしさからか赤面して無言。

「ララ先生なら東君と話してるけど。数学準備室にいると思うよ」

「なら待ってた方がええみたいやな」

レイ君がふと華南ちゃんの顔を覗き込んで。

「…嫉妬してはる？」

笑顔でそういった。

「…してないわよ」

「うせやん。ちよつと怒った顔してはるで」

さっきの東君と先生みたいに対照的な表情。

「…ちよつと、ね」

「じゃあカナンにもやったるわ」

そう言うつと唐突に華南ちゃんにもお姫様だっこ。

「…降ろして」

機嫌を損ねている表情で華南ちゃんが言う。

「ええやん、カナンリーちゃんよりあつたかいもん」

「…はあ」

華南ちゃんも深いため息をついた。兄妹揃ってため息の多い状況に置かれてるなあ…。

「…そういえばリーちゃん、先生探しにきたんでしょ？」

レイ君の奇行を無視して水希ちゃんがリーちゃんに聞く。

「うん。でも明くんとお話してるんだし終わりそうもないかなあ…」
不安げな表情で数学準備室の方向を見る。

…どうしよう、話題がない。

「…足、大丈夫?」

「ふえ?あ、うん、大丈夫だけど…」

見ると、少し赤くなっている程度だった。

「…ならよかった。急いでたから転んだとか?」

「うん…。4ヶ月ぶりだったから、早く会いたくて。そしたら転んじゃって、レイ君に無理矢理…」

「ああ、そうなんだ…」

4ヶ月。肉親と会えない4ヶ月。私には耐えられないだろうその長い時間。リーちゃんはその時間を耐えてきたんだと思う。

無情にも時間は過ぎていき、結局その休み時間はリーちゃんとラさんが顔をあわせるところはなかった。

「じゃあ、私の初!授業ということだ!」

そのすぐ後の授業で、ララ先生が明るい笑顔でそう言った。教室もどことなくうれしそうな表情の生徒が多い。

「修学旅行の行き先や班のメンバーその他もろもろを決めたいとお
ー 思います!」

2年生の最大イベント、修学旅行。

メンバー、行き先は殆ど生徒が決めるこの学校、毎年すごい盛り上がりを見せる2年生。

「行き先はこのプリントに以前とったアンケート結果として全部リストアップされてるので10分くらいでメンバー決めてそのあと行き先を大まかに決めちゃってね!」

なんかなげやりな気がする。まあいいか。

「メンバー構成は男子3人女子3人ね。10分で決まらなかったら
アマダできめるから覚悟してね!」

ちなみにそうは言ったものの過去一度もアミダで決まったことは無いらしく、そういわれるとスパッと決まるのが伝統のようなものらしい。

「高校生って普通男女別の班に分けるもんじゃないの…?」

ざわついた教室の隅で、東君がそう呟いた。

「ウチは代々男女混合だそうだよ。なんでかは知らないけど…」

水希ちゃんが答える。

私の班のメンバーは、やはりいつものメンバーだけど、男子は東君一人。なので、適当に男子を調達する必要があるのだけれど。

「…僕が集めたほうがいいのかねえ、男子2人は?」

私の視線に気付いたのか、東君がそう言って立ち上がる。

「別にいいよ。あまり者がくるだろうし」

「そか」

水希ちゃんが言うと東君は座りなおした。

「……過去、ね」

しばしの沈黙があった後、華南ちゃんが口を開いた。

「アキラの過去なんて、あの子に比べるとたいしたこと無いように思えるんだけど?」

冷たいような、それでいてどこか優しそうな口調で言う。

「…前も言ったでしょ。僕は…弱いから」

「理由になってないじゃない。弱い、だから過去に囚われてもいい。そんなことはないでしょ」

華南ちゃん言葉に東君は無反応だった。

「東君、さっきも言った、『過去』って…」

水希ちゃんが言うと、東君は笑みを浮かべて言う。

「…なににせよ、今する話じゃない。時が来るまで待て、つつーわけだ」

そしてへにやりと笑う東君を見て、華南ちゃんは溜息を漏らす。

「…そうね。でも私は、あなたがその『時』を逃しそうな気がして

ならないのだけど？」

「…否定できないねえこりゃ」

弱々しそうな笑みを浮かべた東君に、再び華南ちゃんは溜息を漏らした。

…なんか私会話に入れない。そんなことを思っていたとき。

「…そつちの班、入れてもらっていい？」

男子二人がこっちにむかって話しかけてきた。

片方の男子は背が高く、髪も短い。見るからにスポーツマン、といった雰囲気男子だった。名前は確か川瀬君。

もう一人のほうは、背は低いわけでもないけど高いわけでもなく、髪も短いわけではない、こういうと失礼だけどこれと違って特徴のない男子だった。名前は…えっと…。

「川瀬君と…杉山君だったけ。よろしく」

ああそうだ、杉山君だった。

川瀬君は卓球部のエースだって聞いたことがあるし、背も高くスポーツマンってことで結構人気がある。

大して杉山君はとくに目立つものは無く、影が薄く名前もあまり知られていない人だったつけ。

それぞれ軽い自己紹介をして、班は決定した。

「はいそれじゃあ決定したのでアミダはなし、ということになります」

ララ先生の笑顔が輝く。内心、アミダ（娯楽）がなくなっただよと寂しい、なんて思っているんじゃないかって思ってしまうことがあるらしいが、微塵も感じさせない笑みだった。

「じゃあ次は行き先…を？」

先生の言葉の最後が疑問系になったのは、非常ベルが鳴ったからだった。

一瞬ざわつき、すぐ落ち着きを取り戻す教室。

『緊急事態、緊急事態。何者かが校舎内に侵入しました。ナイフを

持っているので、全員教室に非難してください。教員の方は…』
すぐさま放送が入る。

…なんてこつたい。

「みんな窓と戸に鍵を…」

ララ先生が言葉を発した瞬間、戸が蹴り飛ばされる。

「…よお、ガキ共」

そう言つて姿を現したのは、覆面を被つた男性の二人組みだった。二人とも力があることを一瞬で認識できる。ララ先生よりも高く、大柄。

そして。

「…リー…ちゃん…？」

言葉を発していないかつたほうの男の方には、気絶しているらしいリーちゃんが担がれていた。

「気分はどうだ？最悪か？ハハハ」

愉しそうに話しかけてくる男性。

「まあそう怖がるな。取つて食おうつてわけじゃ…」

「せやつたらまずその悪趣味な覆面とつたりや」

関西弁が男性の背後に立っていた。その手に握られていたのは、銃。

「…貴様、いつからいた？」

微動だにせず男性が問う。

「今さつきや。ついでにそつちのも、その子離したり」

リーちゃんを担いでいた男性に動くことなく言つ。

「俺は銃を突きつけられているわけじゃない。従う理由なんて…」

「だつたら銃を突きつければ従うのか？貴様は」

隣にいた東君も銃を手にし、まっすぐ構える。

「…いいのか？人質これに当たりかねないぞ？」

「ナメんな。そんな腕してるやつが銃刀法違反で捕まりかねない行為をするわけないだろう。それにな…」

男が急に体を反つた。

「私もいるのよ。これでも色々やれるんだからね、私も」

男の後ろにいたのは華南ちゃん。こちらも、その手に銃。

「…さて、どないしよか？3対2や。大人しく逃げるなら危害も…」

「そうはいかない」

レイ君の言葉を遮り、そう言ったのは東君だった。

「悪趣味な覆面外せよ」

冷たく、冷酷で、憎悪に満ちた目で。

「カイザー、マイン」

男たちの名前を呼んだ。

「…そうか、あの時の小僧か。…フハハ、あの時は逃げ出したのに今は強気だな。仲間がいるからか？」

レイ君に銃を突きつけられている方の男性が言う。

「カイザー……。相変わらずその喋り方…虫唾が走る」

東君の目の色が変わる。憎悪一色に。

「…ああ、なるほどな。そりゃこいつらを逃がすわけにはいかんねんな」

レイ君も納得したように言う。そして。

「ほなまず1発撃つとこか」

そう言っただけでカイザーと呼ばれた男の右肩を打ち抜いた。

弾は貫通し蛍光灯を割る。

「…マイン、まずその子を離して」

華南ちゃんも銃を突きつけたままもう一人の男性に言った。

「…無菌室育ちの嬢ちゃんがよく言うね」

そう言っただけでマインはリーちゃんをララ先生の方に投げ飛ばし、先生はそれを受け止める。

それと同時に。

「…さあ、ゲームをはじめようか」

カイザーは愉しそうな声で覆面を外し、同時にマインも覆面を外した。

第九章 ゲームノハジマリ

ゲームをはじめようか。

カイザーと呼ばれた男は言った。
つまり。

「ああ、そうだな。この下らないゲーム……」
「すぐに終わらせたるで」

冷酷な、憎しみに染め抜かれた声で東君が言い、レイ君が同じ瞳で続く。

「ああ……存分に愉しませてもらおうかねえ……」
カイザーは楽しそうに、愉しそうに言う。

状況を整理しようかな。

私が持たないから。

今日の前にいる男はカイザーとマインという名前らしい。過去に東君やリーちゃんと面識があるみたいで、相当深い因縁があるように見える。

レイ君は当事者、というわけではないのだろうけれど、東君とリーちゃんがかかわってるんだから多分自分のように思ってる。

華南ちゃんは聞いただけなのかもしれない。事情を把握してはいるが憎しみの色は目にはない。

ララさんはただ硬直してる。リーちゃんと関係があるということ
は、ララさんとも関係があってもおかしくはない。

リーちゃんは気絶してる。今はララさんの細い腕に抱かれてる。

東君、レイ君、華南ちゃんの手には銃。

カイザーは右肩を負傷し、血が流れている。マインは平然と突っ立ってる。

この状態で始まる「ゲーム」。多分、それは。

東君と、リーちゃんの過去に決着をつけるってことなのかもしれ

ない。

覆面を外したカイザーの顔。左目のところに斬られたような傷跡がある。

対し、マインにはとりたて特徴はなかった。

どうも対照的な二人である。

「さっき俺が撃ったように銃は本物や。頭に数発も撃てば即死は逃れられへん」

レイ君が冷酷な、冷酷な声で言う。

「…できれば俺はもうこないなもん持ちたないんや。…退いてくれへんか?」

少し。少しだけ優しさを含め、続ける。

「…アキラ。お前もそれがええ思つとるやろ?」

視線は変えないまま、レイ君が東君に語りかける。

「今の関係壊したくないんやろ? みんなで面白おかしく過ごしてたいやろ?」

目の色とは違い、優しさだけを込めて語りかける。

「…ああ、そうだな」

一瞬、悲愴な表情になつて東君は答えた。

「…でもそれは間違いなんだ。僕なんか…選んでいい道じゃない」
ゆっくり目を閉じ、そしてゆっくり開く。

「華南。みんなを連れて逃げろ」

私はその言葉で完全に思考が停止してしまった。

いや、停止というか。

「…私は…お荷物でしかないの?」
声に出ていた。

そのことしか頭に浮かばなかった。

水希ちゃんも同じよう、硬直していた。

「…いや」

東君が冷酷なだけの表情になって言う。

「…俺はこれからきつと罪を犯す事になる」

ああ、東君はきつとこれからどうなるかわかってるんだらう。

「…あまり、いい影響のものじゃない。それに…僕をあまり嫌ってほしくない、から…」

だから彼は。

「…頼んだよ、華南」

彼は、罪を。

罪を自分だけが着るように。

「…ええ」

嫌ってほしくないがために。

「…来て」

私たちを遠ざけるのか。

「…先生、手伝っていただけますか？」

それだけの、ために。

だから私は。

「東君っ！」

叫んでいた。

悲しそうな表情をする彼に。

馬鹿な彼に、気づいてもらいたくて。

「…死んじゃ、やだよ…？」

そう言って、水希ちゃんを抱き起こし、その場を後にしようとする。

「光さん、水希ちゃん」

東君が呼び止める。

「…ごめんね」

出る言葉は謝罪。それと。

「…幸せになつてよ。それを諦めた、僕らの分も」

私は黙って頷く。頷くしかなかった。

私は水希ちゃんと一緒にその場を後にした。
外に出た瞬間聞こえた、数発の銃声。

第十章 オワリカラハジマルセカイ

数十時間。

そう感じた時間は、わずかに15分。

警察の到着前に一人の生徒が校舎から出てきた。

血まみれで。

全校生徒と、教師の視線はその生徒に集まった。

血で赤く染まった、けれど緑色をしていることがわかる。

嗚呼、やっぱり彼は。

彼は、もう戻れないのか。

「レ…イ君」

水希ちゃんが掠れた声で名を呼ぶ。

先程校舎の外に出たころぽつぽつと降っていただけの雨が、急に激しくなった気がした。

レイ君についた血を洗い流すかのように。

「…あの時」

光を灯していない瞳。

希望などすべて消えてしまったというような表情。

絶望に染め抜かれた声からは、いつもの馴れ馴れしい関西弁は消えていた。

「リーちゃんのお父さんが殺されたとき…」

リーちゃんはピクッと反応し、目を覚ます。ララさんが心配そうな表情で彼女を抱きしめた。

殺された。きっと、あの二人だろう。

「リーちゃんは庭にいた」

以前東君は言っていた。

『あの子は成長が止まっている』と。

「お父さんと一緒に…」

きつとそのきつかけになつた事件だろう。

「一緒に…芝生の手入れをした」

リーちゃんの表情は暗い。思い出しているのだろう。

「いきなりあいつらが現れて、すぐにお父さんは殺された」

ぞつとするほど、冷たい声で語り続けるレイ君の目には、涙が流れている気がした。

「リーちゃんは血を浴びて…さっきの俺みたいになつてた」

華南ちゃんが立ち上がり、ゆっくり歩いていく。

「ただ、殺さないで、と言い続けて…それで…」

華南ちゃんはレイ君を抱きしめた。

校舎からは何の音も聞こえない。気配もなかった。

「その場にいたアキラもまた、なにもできなかった」

関係者は全員暗い表情をしている。

無関係な人間は何を言っているのかわかっていない様子だ。

「…あいつはそれを悔いていた。ずっと」

つまり彼は。

「…夢に出るほどに。目を閉じると鮮明に思い出すその光景が…脳裏に浮かんでくるその光景が…あいつを傷付け続けてた」

彼は、リーちゃんのために。

「あいつは悪夢を終わらせたかった。何に変えても、あのときの罪を、新しい罪で洗い流そうとしてた」

自分とリーちゃんとララさんのために。

復讐をしたのだ。

「…殺人を犯し…殺されてまで」

戦慄。

水希は驚愕の表情になり、やがてその瞳には光を映さなくなった。

「そのもつと前にリーちゃんのお父さんは…アキラを保護した」

そこからは、全員初めて聞く話だった。

「…俺やアキラみたいな、災いの種を保護した」

災いの種。きっとそれはレイ君や東君のことで。私たちには理解できない何かがあるのだろう。

「話ができるのはここまでだ」

レイ君がそう言うと同時に、パトカーが到着した。

「さよなら、お二人さん。元気でな」

「え？」

雨に流されて血はすべて落ちたその人は。儂げに微笑んで、別れを告げた。そして。

「幸せあれ」

眩くと同時に、消えた。

ふっ、とその場から。

辺りを見渡すも、いない。

「光ちゃん……」

水希ちゃんが、小声で話しかけてくる。

「華南ちゃんも、一緒に……」

「あ……」

華南ちゃんもいなくなってた。レイ君と一緒に。みんなみんな、急にいなくなってる。

「……」

急にそれを実感して。

「……ああ……」

涙が止まらなくなった。

水希ちゃんも、リーちゃんも一緒に。

私には、何もわからなくて。

それが単に、つらかった。

第十一章 ミライハミテイデアル

全部の騒動が片付いたのは、あれから一月がかかったころだった。ララさんとリーちゃんは失踪した。

表向きには。

こっそりと私たちに別れと、東君の思いを告げるために。

彼の最後の願いを聞き届けるために。

「…アキラ君は、貴方たちのことを悔いていた」

ララさんが言った。

「ピアノをしてみないか、と誘ったけど…殆ど教えることができなかった光ちゃん」

すごく。

すごく悲しそうな表情でララさんは言う。

「自分が好きになったことで、中途半端に巻き込んで悲しませてしまった水希ちゃん」

リーちゃんは泣いている。

東君のことだろう。きっと、私たちよりずっと彼のことを大切に想ってたんだと思う。

「自分と同じ罪を着せてしまって、罪人の烙印を押させてしまったレイ君。なにもできないまま終わってしまった華南ちゃん」

ララさんの目から涙が零れる。

「…なにもできなかつたことを悔い続けて、私たちに対して復讐しか自分に行うことができないと思い込んでしまったんだと思う。あの子は…」

ぼたぼた、と涙が零れる。

「…あの子は馬鹿で…繊細で、脆くて…でも強がって心配させないようにして…」

ララさんの涙は止まらない。

「…ごめんなさい」

罪悪感に駆られて私は謝った。

「…私は、何もできなかった…」

涙を零しそうになった私のその言葉に、ララさんは首を振った。

「…あなたたちは悪くないわ。全部、…全部、運命なのよ」

悲しそうな、哀しそうな表情で。

「…私たちも、日本を出ます」

リーちゃんが言った。

わけがわからなかった。

みんな。

「…自分勝手にごめんなさい。…どうしても、ここにはいられなく
…て…」

みんないなくなつて。

あのころに戻るわけじゃないのに。

二人でいた時間に戻るわけがないのに。

「…ごめんなさい。…今まで、ありがとう…」
そう告げて。

それだけ告げて、二人は走って消えてしまった。

あれから、三年が経った。

なにも。

なにもわからないまま。

あのほんの短い間だけの楽しい日々と謎を残して。

東君。

教室で男二人　カイザーとマインだろう　と共に血まみれで

倒れてたらしい。すぐに死亡が確認された。

水希ちゃん。

ララさんとリーちゃんの直後、ガケから飛び降り、自殺。

レイ君。

あれから連絡もなにもない。どうしているかもわからない。

華南ちゃん。

レイ君同様、わからない。

リーちゃん。

手紙が数通来た。元気だとか、今何をやっているか、とかが書いてあった。肉体的には元気なのだろう。

ララさん。

担任になったその日に失踪して、大騒ぎになったけど、リーちゃんと一緒にいるらしい。

私は。

私は、あの事件以降なにもしないままでした。

誰もがいなくなつて。

急に一人になって、わかった。

みんなといることが、どれだけ幸せなことだったか。

嗚呼、私は。

なにをしていたのだろう。

私はレイ君達の行方を探している。

謎。

あのとき残された謎を解くために。

幸せが、いきなり不幸になったあの事件の真相のために。

でも彼らの行方はまだわかっていない。

謎は、謎のまま。

一番嫌な終わり方で、私の人生も終わってしまうのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3915c/>

風の音

2010年10月8日14時22分発行